

折り返し点

—— 映画文学人生論

参考；永井荷風『墨東綺譚』
新藤兼人『ある映画監督 溝口健二の記録』
小津安二郎『全日記』
黒澤明『蝦蟇の油 自伝のようなもの』
今村昌平『映画は狂気の旅である』
山田洋次『映画をつくる』

わたくしは殆ど活動写真を見に行つたことがない

折り返し点まで来たところで、一休みしよう。約一年かけて、五十本の映画を観て、五十篇の原作を読破したので、すこし疲れた。

五十本の映画は、本数からいえば『男はつらいよ』シリーズ四十八作とほぼ同じだ。寝ころがって、DVDを眺めるのは楽だが、五十篇の原作を読むとなると、内容によっては苦勞する。

「わたくしは殆ど活動写真を見に行つたことがない」と、永井荷風は『墨東綺譚』の主人公に語らせている。関東大震災の後、「遊びに来た青年作家の一人が、時勢におくれるからと言って、無理やりにわたくしを赤坂溜池の活動小屋に連れて行つたことがある。何でも其の頃非常に評判の好いものであつたというが、見ればモオパッサンの短篇小説を脚色したものであつたので、わたくしはあれなら写真を見るにも及ばない。原作をよめばいい。その方がもっと面白いと言つた」。

これは荷風の映画観である。私は若い頃、映画をあまり観ていないが、モオパッサンの小説も読んでいないので、映画よりも面白いとは断言できない。小説を面白いと思うようになるには、ある程度、読む力を發達させる必要があるようだ。

山田洋次監督の映画『男はつらいよ』シリーズは面白いと思ひ、四十八本のすべてを観た。寅さんが二十年ぶりで、ふるさととの関東葛飾郡柴又村



折り返し点

映画文学人生論

に戻ってきたのは一九六九年。私が寺山修司の影響で、書を捨てて、町へ出た頃である。そんなことを思い出しながら観ているうちに、私にとっては文学が故郷のような気がしてきた。

そこで、寅さんが年に一度か二度はふるさとの柴又に帰るように、私も文学のふるさとへ帰るよくなつもりで、なつかしい作品を読み直したり、未読のままの作品を読むようになった。

といっても、明治二十年から昭和四十年頃までに発表された約八十年間の作品のうちのわずか五十篇にすぎない。二葉亭四迷『浮雲』から寺山修司『書を捨てよ町へ出よう』までだ。

夏目漱石の作品は、敬意を払って十五篇を選んだ。その他三十五人の作家はそれぞれ一篇だけとかたよっているが、やむをえない。

折り返し点を過ぎてからは、原作よりも映画を優先し、のんびり映画を楽しむことにする。原作のあるものはなるべく原作も読むが、原作の文学の質は問わない。純文学とか娯楽文学あるいは通俗文学とかの区別は考えない。

ただし、映画というジャンルにおける幻惑の手口を知っていたほうがよいと思い、監督篇、俳優篇、脚本篇、撮影篇、音楽篇という項目にわけ、さらにテーマ別に災害篇、権力篇、無常篇、原罪篇、大河篇という項目をもうけてみた。

息荒く野太く白し走りぬき